

中国農村における地域社会の開放性と自律性

—北京市郊外一山村の観光地化を事例に—

一橋大学 南 裕子

1. 目的

今日の中国農村の特徴の一つに村の開放性の高まりを見ることができるだろう。本報告は、その諸相の中でも、観光地化された村を事例に、人や資本の流入に直面した村における地域の自律性や持続可能性について検討することを目的とする。先行研究においては、外部からの開発主体の参入が、地域の自律性（計画策定、地域資源の利用、利益の享受等）や観光地としての持続可能性をゆるがすことが、しばしば指摘されている。こうした問題状況に対して、コミュニティ参加論、エンパワーメント論からの検討がなされているが、その実現のための「あるべき論」や理念の提示に終わるきらいがある。そこで本報告は、議論がこのようなパターンに収れんしてしまうことからの脱却を目指す。

2. 方法

そのための方法として、少なくとも現在までは上述の問題状況が顕在化していない村を事例に、その要因をさぐる。事例村は、北京市郊外の一山村で、1990年代前半から村内の多数の農家が民宿経営を始めたことで農村観光地として知名度を上げ、さらに、別荘地としての開発、政府の農村整備事業もこの間に経験している。2013、14、15年に、村幹部、村民へのインタビュー調査を行った。

3. 結果

(1) 外来者・資本に対しては、村、村民共に、自らがコントロール可能な領域（土地、家屋の使用権）を手放し、自身が縮小する一方で、それにより次の発展の契機を得ている。

(2) 農家民宿経営の外来者と村の間には、家屋の一部を賃貸する本村人や親戚関係にある本村人がいわば後見人となり、外来者の管理、混住化に伴う秩序維持がなされている。

(3) この村の観光業が、外来者でも担い手になり得る「民俗旅遊」であることが、持続可能性に寄与する。地元の「農村生活」や「民俗」の真正性へのこだわりが主客双方で希薄である。

4. 結論

本報告の目的に照らせば、地域の実態に即したコミュニティ参加、エンパワーメントの有効な方法が見いだされるのかどうか問われる。だが、本事例からは、その実践やニーズ自体を見いだすことは難しい。むしろそうした経路をとらずに村や農家が自律性、ツーリズム地域としての持続可能性を保持してきた点が注目される。自律性についてその主なポイントは、

(1) 村の経済発展の必要から出現した別荘地など、村がコントロール不可能な領域は隔離し、コントロール可能な領域との棲み分けで、共生をはかっている。村の村民へのスタンスも同様で、最低限の関与で、村民それぞれの状況対応力、自発性に委ねている。ただし、そうした個の動きの一方で、全体としての調和を維持させた秩序形成メカニズムを今後さぐる必要がある。

(2) 上記に由来する一見すると村としてのつかみどころのなさ、そして村の組織が主体となった観光地化でないことから、地方政府や外部資本は介入しにくく、自律性も問題化しにくい。

文献：南裕子，2000，「中国におけるグリーン・ツーリズムの展開と村落自治組織—村民自治制度、農村土地所有制度との関連から—」一橋大学教育開発センター『人文・自然研究』第9巻。